

保護者の皆様

平成27年度「全国学力・学習状況調査」の結果について

千早赤阪村立千早小吹台小学校
校長 山下桂滋

今年の4月21日に実施しました標記の調査(6年生対象)の結果から見てきた本校6年生の実態及び課題と今後の改善点について、学校として行った分析と考察をお知らせします。

国語科の調査より

◆A 調査(主として知識)について

平均正答率は、全国平均を少し上回っています(全14設問中、9問で上回っていました)。

領域別の集計結果について見ると、「読むこと」だけが、全国平均をわずかに下回っています。他の「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(いわゆる「言語事項」)」は全国平均を少し上回っており、中でも「話すこと・聞くこと」は、大きく上回っています。その設問内容は、話し合いでの提案を聞くときの工夫に関する問題でした。

正答率が、全国平均と比べて低かった設問を以下、取り上げます。いわゆる「言語事項」では、「文の主語をとらえること(全国平均自体も低い設問でした)」、「鳥の『巢』という字を正しく書くこと」でした。「単」や「果」といった誤答が、全国でも多かったようです。「読むこと」で課題があったのは、「新聞のコラムで筆者が引用している言葉を書きぬくこと」に関する設問でした。「引用」は、5年での学習内容ですが、「～と書いてあります」「～によると」という例を学習しており、今回の設問にあった「～というものがある」という表現に慣れていなかったかもしれません。引用部分は「」書き(かっこ書き)になっているという知識の定着も必要と考えています。もう一つは、「3人の登場人物の相互関係とらえること」に関する設問でした。昨年度の調査でも、これと似た問題の正答率が低く、「読解力」を問われるものが苦手な傾向は続いています。物語文を読み、「～ということはこの人物の考えは・・・」と、自分の言葉で整理して考える力を、もっとうつけていく必要があります。

◆B 調査(活用力)について

平均正答率は、全国の平均正答率を少し下回っています。

設問別では、9設問のうち、全国平均を上回ったのは4設問で、ここ数年で見ると、傾向としては今年度は大きく改善しています。活用力について特に課題を感じた項目とその内容は、次の通りです。

「インタビューの様子の内容をまとめて書く」問題では、交流会のコーナーに参加してよかったと答えた人の理由について、資料から「話した内容」と「表情や声の調子」の両方を読み取って、組み合わせで一文で書くことが求められていました。全国平均でも正答率が最も、そして極端に低い問題でしたが、本校の正答率は、さらにそれを下回っていました。

グループでの合奏で、5人が担当する楽器を希望調整して決めるための分担図を見て、条件に合わせて担当を確定する手順を説明する文を書く問題も、全国平均同様、本校でも正答率が低い結果でした。

最後の2問は、お話の場面に合わせて、紙芝居の絵を4枚に分ける設定で、特定の絵に合った場面の始まりを選ぶ問題と、人物のせりふをどう読むのか理由を入れて説明する問題でしたが、こ

れらもやや低い正答率でした。

児童質問紙には、「調査問題の解答時間は十分でしたか」という設問が、国語A、算数A、国語B、算数B、理科それぞれにあります。いずれも、「全く足りなかった」と回答した児童はいませんが、「やや足りなかった」と答えた児童が多い傾向にありました。「時間が余った」「ちょうどよかった」と答えた児童は、全国平均よりも少ない結果になっています。特に「国語B」では「やや足りなかった」と回答した児童の割合が全国平均の2倍と、他の調査と比べて断然高い結果でした。丁寧に取り組み、慎重に判断する児童の割合が高い学級集団ですので、仮定の話ではありますが、解答にもう少し時間をかけることができれば、紙芝居に関する最後の2問の正答率は、もう少し上昇したかもしれません。

国語Bの解答時間が足りなかったと回答した児童の割合が全国平均と比べてかなり高いのは、この2年続けての傾向です。たくさんの情報をできるだけ早く読み取って理解し、思考する経験をふだんの学習でできるよう、意識して組み込むことも必要ではないかと考えています。

B調査は、内容を関係付けて捉えたり、まとめて書いたりする設問が多く、判断して書く力が問われます。書くことを通して、物事や自分の思考を整理する方法を身につけ、授業場面だけでなく、実際の生活の中で実践してその方法の良さを体感し、またさらに活用の機会を増やす…といった、真の活用力を育てていくことを長期的な課題として、授業改善に取り組んで参ります。

算数科の調査より

◆A 調査(主として知識)について

平均正答率は、全国平均をわずかに上回っています(全16設問中、11問で上回っていました)。全国平均よりも正答率が低かった問題5問は、次のようなものでした。

- ・180度より大きい角度の大きさのイメージをもつ問題。
- ・分度器の目盛りを見て、角度を読み取る問題。
- ・目的地への到着目標時刻が決まっていて、出発地から2区間の区間ごとの所要時間が示され間に合うよう出発時刻を計算する問題。
- ・直方体の展開図に足りない残りの一面を、どの辺に付けるか選ぶ問題。
- ・ある規則で○印が並んでいる図と、並んでいる○の数を計算する式とを見比べて、式の意味が分かるよう、式の数字に対応する○を黒く塗る問題。

角度については、ふだんの生活ではあまり出てこない180度以上の大きさの角度に不慣れな傾向があると思われます。時間の逆算は、昨年度もB調査で似たようなスケジュール調整に関する問題があり、やはり正答率は低い結果でした。展開図の問題もそうですが、時間・空間のイメージをもって考える経験がもっと必要なのだろうと判断しています。

数と計算に関する基本的な問題については、100%、または100%に近い正答率だったものもあり、全体的にみると、基礎的、基本的な内容の理解と定着は進んでいるとみています。

◆B 調査(主として活用)について

平均正答率は全国平均を少し上回っています(全13設問中、7問で上回っていました)。

活用力について特に課題を感じた項目とその内容は、次の通りです。

- ・20%増量した飲み物商品の、増量前の内容量を求める、「割合」の問題。
- ・分割された二つの図形の面積が等しくなるわけを書く、「図形の対角線と面積」の問題。

この2問は、全国平均の正答率も極端に低かった問題でしたが、本校正答率は、それを下回っていました。「割合」は、小学校算数科の中でも難易度の高い学習単元です。割合を求める基本的な計算以外に、割増前の値や、値引き後の額を求める問題は、理解と定着に時間がかかる児

童が毎年多いのが現状です。5年2学期後半の学習内容ですが、その後の復習に重点をおく必要があると考えています。

- ・ペットボトルキャップ回収の目標値に合わせ、月ごとの回収数から、最終月に目標達成が必要な最低ラインを計算し、足りるわけを書く、「概数の活用」の問題。
- ・ラインを引いて正三角形を作るための、巻き尺の目盛りの取り方の問題。

この2問は、全国平均の正答率を上回ってはいますが、正答率自体は、他の問題に比べて低かったものです。生活経験上のイメージがあれば、問題理解はしやすかったかもしれません。

また、算数の決まりごとを活用する問題では、地図の経路の距離を比べるもの(平行四辺形の向かい合った辺の長さは等しいことを活用)は全国平均と同様に、本校でも低い正答率でした。一方、ソフトボール投げのラインを引くために30度の角度をとるもの(正三角形の3つの角はどれも60度になることを活用)は、わけを説明する問題でしたが、全国平均よりも高い正答率でした。

B調査は、数学的な考え方を問われる記述式の問題が多く出題されますが、課題点も見られる中、よくできている問題もあり、活用力の育成については、改善の傾向が出ているかもしれません。成果ととらえられるかどうかは、次年度以降、中・長期的な経年変化を見て判断する必要があります。昨年度も考察に入れましたが、見える情報(問題文・図・グラフ・資料等)から判断することについては、文章読解力も時間・空間の認知力も必要となります。また、考える場面での設定・条件が複合的なものについては、「まずは～、そして～」のように順序立てたり、「～ということは、つまり」のように、自分の言葉で置き換えたりして整理することも重要です。ふだんの生活・学習でも、そのような思考活動を体験する機会を、学校として意識して作っていく必要があると考えています。また、授業の中では、状況や設定に応じて、「根拠となることがらを過不足なく説明する」ことができるよう、考える・書く・話す学習活動を、これからも大切にして参ります。

理科の調査より

平均正答率は、全国平均を少し上回っています(全12設問中、8問で上回っていました)。

顕微鏡の名称を書く(顕微鏡)、顕微鏡の適切な操作方法を選ぶ(調節ねじを回した結果、ピントが合った)問題については、本校としては予想外の低正答率でした。無回答もありましたが、「顕微鏡」と漢字で書こうとして字を間違った例が多かったのではないかと推察しています。また、昨年度実際に授業で顕微鏡を扱った際は、明るさが足りず、鏡(反射鏡)の調整をよくしていたようで、問題の絵図で像が鮮明になったのは、ピントよりも明るさの変化によるものと判断した児童もいたようです。見えている大きさは、操作後の絵図でも変わっていないのですが、「対物レンズをちがう倍率のものにした」という選択肢で誤答した例もありました。人気のある学習器具で、児童は意欲的に利用していますが、一つひとつの操作方法についての理解がもう少し必要なようです。

インゲン豆とヒマワリの成長の様子や日光の当たり方から、適した栽培場所を選び、選んだわけを書く問題では、伸びる背丈の違いを考慮した上で、日光が当たる南側から4列に並んだ畝にどちらの種を播くか判断する力を問われていました。知っていること(習った一つひとつの知識)を組み合わせて、プラスマイナス各条件で判断しながら、選択・消去する必要性がありました。国語B、算数Bと同様に、理科でも、活用力を育てていく必要があります。

学習状況アンケート調査より

児童質問紙によるアンケート調査から見てきたことをいくつか分析し、考察します。

「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがありますか」、「学級みんなで協力して何かを

やり遂げ、うれしかったことがありますか」という設問では、当てはまると回答した児童が多いのが特徴的でした。「自分にはよいところがある」については、はっきりと「当てはまる」と回答した児童は少ないものの、「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童が非常に多く、両方を合計すると、肯定的回答の割合が、全国平均を上回っていました。

控え目で慎重な気質の児童が多い集団らしく、「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか」については、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を合わせた割合が低く、逆に、「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる」については、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を合わせた割合が非常に高い結果になっていました。4月の調査後、6年生は、学校の最高学年として人前に立って話したり、縦割り班、委員会などの場で意見を出したりする経験を積んでいますので、今は、意識が変わってきているようにも思います。

家庭生活にかかわることで、「朝食を毎日必ず食べる」という児童が全国平均に比べ少ないことが、課題として挙がっていました。これは、毎年1月に本校で行う「学校教育アンケート」における4～6年生の回答でも、同様の傾向があります。「毎日、同じくらいの時刻に寝ている、起きている」という児童は、全国平均を少し下回る程度でした。毎日朝ごはんをきちんと食べることで、生活のリズムがずいぶんいい形で整います。ご家庭の事情、生活サイクルはそれぞれ異なると思いますが、意識していただきたくお願い申し上げます。給食センターでも、食育の観点から朝ごはんに関する情報発信に今後取り組むと聞いております。ご参考になれば幸いです。テレビ、ビデオを見る時間で、4時間以上、2～4時間と回答した児童は全国平均より多く、2～3時間という回答も含め視聴時間が長い傾向があることが分かります。

まとめ

小規模校で調査母体数が少ないため率数値の変動も大きく、マクロ的な分析の有効性は慎重に判断する必要があると思いますが、少人数の良さを生かし、全体傾向のみならず一人ひとりの結果に注目し、今後対応して参ります。休み時間や放課後などでの個別の学力保障は、可能な範囲でではありますが継続いたします。また、授業自体も、基礎・基本の定着を図ると共に、授業のねらいや目標を児童と共有して学習を進めたり、知的好奇心を喚起するような学習課題を取り入れたりするなど、工夫改善に取り組みます。

昨年度、そして今年度と2年続けて、本校では国語科を中心に授業づくりの研修を行っております。児童が目的意識を持ち、何時間かの学習のまとめ(単元)を通して、読む・書く、話す・聞く(話し合う)活動に取り組めるよう、授業改善をねらいとして取り組んでおります。算数科では、ここ数年間、教育委員会による人的配置が保障され、今年度も、習熟度別にコース選択ができる形で学級を2分割したり、分割せずT. T. (2人体制のティームティーチング)にしたりして授業を進めております。また、本校では専用の通級指導教室はありませんが、通級指導を週あたり2日行えるよう、兼任の赤阪小職員による指導体制が村の支援により整えられており、小規模ではありますが、個別の学習支援が必要なケースにも対応しております。人的配置は行政の動きによって左右されるところもあります。今後も可能な範囲で、一人ひとりの習熟・定着度合いに適した、きめ細やかな学習指導を行えるよう、職員一丸となって進めて参ります。

基本的な生活習慣の定着と学力向上の間には相関関係があるということが、これまでの調査から明らかになっております。お子様の自立・よりよい成長を願い、学力向上に向けての家庭環境づくりと、基本的な生活習慣の定着に、一層のご配慮をお願い申し上げます。